

08、11、15

世界が尊敬した日本人(43)

石油メジャーと1人で戦った出光佐三

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

今(08年8月)、石油価格の暴騰が世界経済を直撃しているが、日本にとって忘れられない歴史的イベントがある。

昭和28年(1953)5月9日、出光興産(出光佐三社長)の日章丸二世(1万9千トン)がイランからの石油を満載して川崎港に帰港し、世界をアツといわせた。

当時、石油争奪戦争が勃発していた。世界有数の産油国イランは1951年(昭和26)に突然、『石油国有化法』を議会で可決、イラン石油の全権を握る英国アングロイラニアン社(BPの前身)を一方的に接收して国際紛争に発展していた。



怒った英国はペルシャ湾に艦隊を派遣、イラン石油の売買は盗品にあたるとして、買いつけた外国タンカーは撃沈するとの声明を出して、海上監視を強化していた。

これに引っかかったイタリア、スイス共同資本のタンカーはアラビア海で英海軍に拿捕され国際紛争に発展していた。

世界の石油業界は今もそうだが、欧米の国際石油資本(メジャー)が市場を牛耳って、国際カルテルを結んで独占支配していた。独立系の民族資本・出光興産は「消費者に安いガソリンを提供する」を企業理念に掲げて、長年、メジャーと闘争を続けてきた。

一方、イランは産出国として初めて巨大メジャーに挑戦して、各国に売却を呼びかけてきたが、英国の報復を恐れてどこも手を出すものはなかった。

こうした事態に石油界の反逆児・出光は一挙に勝負に出たのだ。イランと秘密裏に、交渉し、世界有数の大型タンカー『日章丸』を船員には一切行き先を告げずに派遣した。

撃沈、拿捕、浮遊機雷の接触の危機を避けながら決死的な航海でイランアバダン港に入港し、イラン全国民の熱狂的な歓迎を受けた。

今度は英国の反撃をさけながら石油を満載し奇跡的に帰港した。英ア社は日章丸の積荷の所有権を主張して、東京地裁に提訴したが、出光は「日本国民として俯仰天地に愧けない行動をいたします」と証言し、裁判は出水側の全面勝訴となった。



英国を相手に出光の国際正義にのつとつた勇氣ある行動は占領からやっと独立したばかりの日本人に大きな感動を与え、出光は一躍国際的な経営者として脚光を浴びた。

出光佐三は明治 18(1885)年8月、福岡県宗像市に生まれた。同42年、神戸高商(現・神戸大)を卒業、従業員3人の石油販売店に丁稚奉公に入り、友人たちから「学校のつらよごしめ」と批判された。

このスタートからして、出光の面目躍如たるものがある。25歳で出光商会を設立、人の意表をつく、奇想天外の行動でのし上がっていった。

大正初めにいち早く満州に進出、満鉄に不凍油を納入して成功をおさめ、独自の潤滑油や機械油を開発してメジャーを抑えて地位を築き、満州、朝鮮、台湾までの幅広い海外市場を押さえた。しかし、敗戦によって、海外資産を一挙に失ってしまった。

この時、出光は還暦60歳である。

昭和20年9月、中国や海外から千人以上の従業員が次々に引き揚げてきたが、人間尊重を唱えた出水は「1人たりとも首を切らない」と宣言。

しかし、巷には失業者があふれて、出光興産にも何の仕事もない。

「まだ仕事は見つからないが、人間しばらく眠る時間も必要、活眼を開いて眠っておれ」『順境にいて悲観し、逆境にいて樂觀せよ』と訓示した。

その後、出光興産は石油元売大手に発展するが「首切りなし」「定年なし」「出勤簿なし」という、どこの会社もやったことのない人間主義を実行するなど、やることなすこと、奇想天外で『日章丸』事件の決断が68歳の時というのだから、遅咲きの天才なのである。

その出光の独創性はいったいどこからきたのか。

出光は子供のころから病弱で、とくに目が悪く、やっと見えるほど。

「眼がよく見えないために、オレはよく考える。だから、独創的なのだ」と豪語していた。

生涯現役を貫き、米寿で悪い目を手術して初めてものがはっきり見えるようになり、90歳過ぎても毎週ゴルフを楽しんでいたというから驚く。1981年3月、95歳でなくなった。